



2516

2401



114  
A4303



大正十一年四月  
大隈侯爵寄贈

去ル辛未ノ冬頭義陸軍理事官トシテ歐米各國  
 上被差遣候旨拜命然ルニ陸軍事務至大至廣魯  
 鈍ノ才學定限アル歲月ヲ以テ百般ノ事務ヲ研  
 究シ得ル能ワサルヲハ素ヨリ知ル所ナリ於是  
 參謀軍務給養三局ノ事務當時省中ニ於テ最モ  
 切要ナル事件ヲ撮出シ此三件ノ事務大概ヲ研  
 究セシメテ請フ然レ其儀遂ニ御沙汰ニ及ハ  
 レスシテ  
 勅旨ヲ賜テ其筭一条ニ云各國ノ内文明最盛ナ  
 ル國ニ於テ本省緊要ノ事務目今實地ニ行ハル  
 景況ヲ觀察シ其方法ヲ研究講習シ内地ニ施

行スベキ目的ヲ立ツヘシト於是  
聖旨ノ深遠廣大ナル思議スヘカラサルヲ知リ  
自カラ才學ノ不足ナルヲ顧ミス實地ニ就キ揣  
摩講究シ他日必ラス皇國人民ノ上ニ施行シ裨  
補アルヲ期シ爾來刻苦勉勵茲ニ歲餘今其目的  
ヲ左ニ立テリ初ニ各國ノ兵理ヲ論シ次ニ編隊  
則并ニ徵兵ノ制ヲ述ヘ續テ下士官上士官ノ事  
ヲ序シ終ニ器械火藥ノ事及ヒ軍醫并ニ陸軍會  
計官ノ事ヨリ鎮臺及陸軍省ノ事ニ至ル其末ニ  
於テ目今我 朝廷ニ施行ヲ要スル所ノ条件  
ヲ區別シ書載セリ

兵何ヲ以テ國家ニ至要ナルヤ兵ハ凶器ナリ而  
メ能ク巨萬ノ金額ヲ費シ人民ヲ勞シ少壯ノ事  
業ヲ妨ケ其學問ヲ礙シ其性ヲ障害シ其才ヲ束  
縛シ其刑罰ヲ嚴酷ニシ或ハ又醜業ニ慣習シ密  
陰ヲ盛ニシ梅毒ヲ繁殖ス而ルヲ況ニヤ砲銃諸  
器ハ勿論上ハ頂上ヨリ下跛底ニ至ル迄人跡所  
屬ノ軍用諸物悉ク皆外國ニ仰クニ於テラヤ是  
レ各國物産出入比較ノ法ニ於テ許サ、ル所ニ  
テ陸軍會計ノ法ニ於テモ亦許スヘカラサル所  
ナリ其害如此然ラハ則國家人民ノ上ニ於テ損  
害アル而已ニテ其至要ナル所以何処ニアルヤ

其益タル帝室ヲ守衛シ邦土ヲ保護シ人民ヲ安  
全ニスルニ過キス其帝室ヲ守護シ人民ヲ安全  
ニスルノ具國ニ法アリ律アリ教育ノ道アリ其  
他政府百般ノ要務アリ何ソ兵カヲ要スルニ足  
ラン夫レ人ノ人タル其性ヤ善政府之ヲ誘フニ  
善良ノ道ヲ以テシ之ニ處スルニ至公ノ法ヲ以  
テス之ヲ懲ラスニ方正ノ律ヲ以テス内民決テ  
不良ヲ討ルヘカラス外人何ソ無理ヲ論スヘケ  
ンヤ兵ハ對敵抵抗ノ器ナリ至公ノ理ニ依リ至  
善ノ道ヲ蹈ム何ソ抵抗ノ器ヲ要シヤ茲ニ二人  
アリ議論ヲ生ス議中一人突然劍ヲ拔テ立タハ

他ノ一人亦忽チ劍ヲ拔キ立テ之ニ應スヘシ之  
レ人情自然ノ然ラシムル所ニシテ他人ノ決テ  
押し制スル能ワサル者ナリ今政府劍ヲ拔テ内民  
ニ對シ外人ニ接セハ内民外人亦應ニ劍ヲ拔テ  
之ニ應スヘシ政府至公至正ノ法律ニ標準シ萬  
機ヲ張弛セハ内外人民何ソ拔劍シテ之ニ對ス  
ヘケン然則今日文明ノ世ニ於テ無用ナル者ハ  
兵數不然兵ハ抵抗ノ器ナリ抵抗ハ人ノ性ナリ  
人抵抗ノ氣アレハ武勇ナカルヘカラス又文事  
ナカルヘカラス人生欠クヘカラサル者ハ文武  
ナリ國亦然リ何ソ夫レ然ルヤ今世ノ人未タ其

理ノ至公至正ナルヲ知ル能ワス於是至公至正  
ノ道ヲ蹈ムヘカラサル者アリ政府是ナリ然ト  
イヘ氏政府ノ事法アリ律アリ能ク之ヲ權衡シ  
又能ク之ヲ節度ス故ニ政府ノ法人能ク之ヲ規  
トシ政府ノ律人能ク之ニ準スルノ際決シテ兵  
ニ用アルヲナシ然レ氏我國意ヲ出ル咫尺人決  
シテ我國法ヲ以テ法トナスヘカラス律ヲ以テ  
律トナスヘカラス萬國ノ公法モ亦時アツテ照  
準トナスヘカラサル者アリ此時ニ當リ誰カ能  
ク之ヲ斷決ス兵ニ非ラスハ決シテ之ヲ斷ス  
ヘカラス夫レ法ト律トハ決シテ人ノ適意ナル

者ナラス常ニ人意ヲ抑制スル者ニシテ人間不  
便ノ具ナリ故ニ人其抑制不便ノ苦ヲ脱セント  
欲スル素ヨリ其自然ナリ人々能其法律ノ國家  
ニ存在スル所以ヲ識得セハ即チ至公至正ノ理  
ヲ知ルナリ然ラハ則テ法律モ無用ナリ兵モ亦無  
用ナリ然レ氏法律ノ人間ニ存在ヲ要スルノ際  
決シテ爾クヘカラサル者ハ兵ナリ法律決シテ  
欠クヘカラス文武決シテ廢スヘカラス故ニ兵  
者其國體ニ法律ニ依リ其權衡ヲ適宜ニシ設置  
スヘキ者ナリ然ラハ則テ我國躰ト法律ヲ知リ各  
國古今ノ兵故ヲ斟酌シ其利害損益ヲ比較シ我

國人兵上ニ於テ其利益ノ有ル所以ヲ知り而後  
之ヲ設置セシムハアルベカラス於是コレヲ見  
レハ兵者獨リ戰時ノ用ノミナラス實ニ治平ノ  
重器ナリ

歩兵隊ノ内其最モ小ナル者ヲ小隊ト云大尉ノ  
司令スル所ノ者也獨乙百八十五人至百二十人  
隊ヲ合スル者ヲ大隊ト云小佐ノ司令スル所ノ  
者也獨乙百八十五人至百二十人  
佐ノ司令スル所ノ者也獨乙百八十五人至百二十人  
ル者ヲブリガートト云各以テ聯ス少將ノ司令  
スル所ノ者也ブリガートト云各以テ聯ス少將ノ司令

ヨント云各國ニブリガートト云中將ノ司令スル所  
ノ者ナリジビ各國ニブリガートト云中將ノ司令スル所  
ト云各國ニブリガートト云中將ノ司令スル所  
者ナリ此コルタルメー數箇ヲ合併スル者ヲコ  
ト云各國ニブリガートト云中將ノ司令スル所  
砲兵隊ノ内其最モ小ナル者ヲバツテレート云  
山用各國六門大尉ノ司令スル所ノ者ナリニ或  
ハ三バツテレートヲ以テジビヨントス即少佐  
ノ司令スル所ノ者ナリ山用バツテレート四或ハ  
六十野用バツテレート六或ハ八ヲ合シレシマン  
トス六佐ノ司令スル所ノ者ナリ

騎兵隊ノ内其小ナル者ヲエスカドロント云  
佛人ヨリ百五十人大尉ノ司令スル所ノ者ナ  
獨百五十人リニエスカドロンヲジビシヨント云少佐ノ司  
令スル所ノ者ナリ又ハ六エスカドロンヲレ  
ジマント云大佐ノ司令スヘキ者ナリ此他土ユ  
擣ユ兵アリ警戒兵アリ守城兵アリ各其隊制ヲ  
別ニス此隊數ヲ區分スルバ第一各國用兵學ノ  
景況ニ関シ第二自國ノ地形第三物貨ノ會計ニ  
依ルナリ而メ之ヲ分賦配置スル第一地形第二  
時勢第三物貨會計第四其地ノ人口ニ依ル而テ  
之ヲ大別スルニコルタルメー又ハジビシヨ

ヲ以テス制獨佛而テ之ニ付スルニ給養會計官  
參謀士官并ニ軍事裁判役運輸隊ヲ以テス此法  
諸國各々其制アリテ同一ナラス  
徵兵ノ制亦各國自カラ其法ヲ異ニス國民一般  
ニ必ラス學術ト兵役トニ服事スヘキヲ以テ常  
法ト為シ徵募ニ應スル後五年間常備スル者ア  
リ制佛國三年間常備スル者アリ制普國二年間  
常備スル者アリ制澳國或ハ又數旬間常備スル  
者アリ制瑞國徵兵ノ法第一國殊第二會計第三  
自他ノ國況第四當時ノ用兵術ニ関ス之ヲ賦役  
スルノ法自カラ異同ナリト雖モ之ニ示令スル

ノ文意大差異アルヲナシ人民ノ其土ニ生ル者  
ハ貴賤ノ別ナク必ス皆兵役ニ服シ各其國權ヲ  
保護シ而又其身所有ノ權ヲ固守シ決シテ他人  
ノ輕侮侵奪ヲ受クヘカラサルヲ以テス人民能  
ク其理ヲ了解シ而後以テ徵集スヘシ然リト雖  
凡ノ兵ヲ徵スルヤ常ニ容貌ヲ強兵ニ模擬シ  
隊伍ニ編シ銃砲ヲ採リ敵前ニ進ニシムル而已  
ヲ以テ本務トスヘカラス人民一般ノ知識敵兵  
ニ超越スルヲ以テ最要トス於是國民中貴賤貧  
富ノ別ナク幼稚ノ時ヨリ郷校ニ於テ普通學ヲ  
教ヘ無テ採番調練ヲ演ハシム此普瑞佛向國古來有

利近年此法ニ惜フ人民心服ノ兵役ヲ金錢ニテ  
賣買スル者ハ歐洲昔日ノ弊ナリ  
是レ人民ヲシテ各自文武ノ道決シテ偏ナルヘ  
カラサルヲ知ラシメ是ノ土ニ生スル者ハ相共  
ニ此國權ヲ護シ而テ又各自所有ノ權ヲ固守シ  
決シテ他人ヲシテ侵奪ヤシムヘカラサルノ理  
ヲ講究スルナリ故ニ強兵ノ基ハ採銃運動スル  
ニアラス國民一般都鄙ノ別ナク郷校ノ教育ヲ  
充分ニシ普ク人民ノ知識ヲシテ甲乙ナカラ  
シムルニ在リ教育ノ道如是兵以テ徵スヘシ兵  
ヲ徵シ官ニ入ル人已ニ普通ノ學問ナリ而又普  
通武事ヲ知ル於是士官下士官ニ從屬シ軍事特



別必用ノ數件ヲ學ビ得ル而已故ニ人各其身務  
ムヘキノ道慎ムヘキノ理ヲ知り滯宮日久シキ  
時ト雖モ其弊害ヲ生スルヲ鮮ク此兵彼兵ニ較  
スレハ其優劣豈ニ宵壤ノミナラニヤ故ニ兵ヲ  
徵スニ方テハ必ス先ツ良下士官ヲ育成セスニ  
ハアルヘカラス

下士官ハ陸軍ノ縁ナリ是縁堅牢ナラサレハ千  
萬ノ兵モ寸用ヲ為ス能ワハ於是各國別ニ下士  
官學校ヲ作り人民中學識兼備ノ者ヲ撰ビ此校  
ニ入レ數年ノ修業ヲナサシメ成業ノ試験ヲ經  
然ル後兵隊ニ付ス其學其識素ヨリ既ニ備リ加

之ニ數年ノ修業ヲ要スレハ一般ノ人民ニ超越  
スル素ヨリ既ニ遙ナリ故ニ其言ヤ實其行ヤ正  
數萬ノ兵卒甘シテ之カ教導ニ服事ス下士官ノ  
善忠實ニ全軍ノ勝敗國家ノ安危ニ関ス慎ニス  
ニハアルヘカラス下士官ヲ撰ビ之ヲ教育修業  
シ全備ナラシムル者ハ士官也於是下士官ヲ作  
ル必ラス先ツ士官ヲ教育セスニハアルヘカラ  
ス

士官ハ陸軍ノ標柱ナリ全軍ノ勝敗國家ノ安危  
國民ノ榮辱ニ関スル所ナリ之ニ教エル信ナラ  
サルヘカラス之ヲ育スル切ナラサルヘカラス

政府ノ最モ用心スヘキ所ナリ之レヲ勉メシム  
ルニ精神實義ヲ以テシテ<sup>之ヲ</sup>勵マズニ名譽<sup>之ヲ</sup>廣<sup>ク</sup>壯<sup>ク</sup>ヲ  
以テシ之ヲ進ムルニ勇憤義烈ヲ以テシ其學術  
ヲシテ他國士官ニ劣ラサラシムヘシ是レ一朝  
一夕ニシテ能ク其宜シキヲ得ヘキ者ニアラス  
而テ之ヲ使用スル決テ定則ニ違フヘカラス  
等ノ事跡ヲ照鑑スヘシ及ヒメ<sup>ツ</sup>ツ一級ノ進退一  
事ノ褒貶國家ノ得失ニ関スル實ニ莫大ナリ  
進退褒貶各國常典アリ帝王ト雖モ故ニ士官學  
校設置ノ方法并ニ地位ハ全軍士官ノ善惡全國  
人民ノ榮辱ニ関ス<sup>ル</sup>米<sup>國</sup>王<sup>ト</sup>雖<sup>モ</sup>故<sup>ニ</sup>士官學

他古今ノ經歷ヲ推考シ萬國ヲ斟酌シ將來ヲ想  
像スヘキ所ナリ士官下士官兵卒ヲ作ル必ラス  
先ツ器械火藥製作ノ設無ルヘカラス陸軍醫官  
ノ教育ナカルヘカラス陸軍會計官ノ育成法無  
カルヘカラス  
器械火藥モ亦國家ノ安危ニ関ス近世ノ戰ニ於  
テ最モ其勝敗ニ係ル大ナリ切ニ能ク古今ノ其  
歴史ヲ閱シ各國諸種ノ得失ヲ斟酌シ裨益ヲ我  
國ニ採ルヲ以テ至要トス然リ而決シテ外國ニ  
仰クヘカラサル者ハ器械火藥ナリ故ニ其製造

ノ方法速ニ設施シ宜シク其意ヲ密ニシ其ユラ  
精フセスニハアル可ラス兵家曰一釘敵國ニ劣  
ラハ兵略上早已ニ一步ヲ譲リ理上比較ノ力ヲ  
持ス可ラスト是實ニ將帥學ノ要務ナリ然ルニ  
砒毒火藥ノ製其學實ニ容易ニ非ラス數年ノ學  
術ト數年ノ試験ヲ經ル者ニ非レハ其ユラ精フ  
スル所以ヲ知ラス而又各國品種ノ良否ヲ弁知  
スルヲ得サルナリ故ニ此校ノ設ケ陸軍諸校中  
ノ最モ切要ナル者トス  
軍醫ノ良否全軍ノ強弱ニ関スト古人ノ言能ク  
之レヲ尽セリ政府ノ最モ能ク注意スヘキ者ナ

リ然リ而軍醫ノ常醫ニ異ル所以果シテ如何抑  
凡百ノ病種常醫ノ知ル所軍醫亦知ラサルヲ得  
ス數萬ノ病症軍醫ノ診断スル所常醫亦診断セ  
ザル可ラス其他折衝割接ノ治療ノ如キ軍醫ノ  
學フ所常醫亦學ハザルヘカラス然而各國昔日  
ノ弊軍醫ヲ特別ノ者トシ此官只軍事所要ノ數  
件ヲ知ル而已ニテ現今人間ニ所在スル許多病  
種ヲ知ラス後テ又之レヲ療スル方法ヲ知ラス  
常醫ハ能ク人間現在ノ病種ヲ治療スルヲ知り  
然シテ軍事所要ノ勤ヲ知ラス於是軍醫ハ常醫  
ノ用ヲ為サス常醫ハ軍醫ノ用ヲ為サス其道同

フシテ其用ヲ異ニス。是レ國家ノ得失人民ノ損益ニ關ルヤ。大ナリ。近時徵兵ノ法改マルニ及テ諸國醫官ノ教育軍常ノ別ヲ為サス。使用ノ法亦後テ大區別ヲ為サス。於是全軍ノ強壯ヲ増シ人民ノ利益ヲ得ル有實ニ莫大ナリ。陸軍會計給養ノ國家ニ緊要ナル素ヨリ論ヲ待タス。算盤一粒ノ差國家ノ興廢全軍ノ勝敗ニ關ス。實ニ精密ヲ尽サスニハアルヘカラサル者ナリ。故ニ是ノ官ヲ撰フヤ。只常人ノ才能アル者而已。以テ是ノ任ニ當ツヘカラス。必先ツ數年兵隊ノ諸務ヲ學ビ。然後此學ヲ講シ。後テ又其事ヲ習ハシメ。追次

其職ニ任スヘシ。若シ不然シテ不學ノ人ヲシテ此任ニ當ラシムハ。必ラス其帳簿上ノ加減乘除能ク其理ニ合スト。氏自國他國ノ比較ニ於テ加減乘除スルノ理ヲ知ルヘカラス。是ノ理ヲ知ル。實ニ會計ノ至要ナリ。不可不學ナリ。如此會計軍醫器械火藥等備リ。士官下士官兵卒有リ之ヲ總ヘ之ヲ括シ。以テ國內ノ鎮撫ニ當テ。又外況ノ變遷ニ應スル者ヲ鎮臺トス。一國ハ尚ホ一家ノ如ク。鎮臺ハ尚ホ戶壁ノ如ク。其家屋ノ形勢ニ依リ。戶壁ヲ以テ大小諸室ヲ各別スル。如シ諸要具皆其用ニ適シ。事ノ有無ニ關セ。又常ニ能ク之ヲ

預備スル者ナリ其費用出糶ノ事其常産入糶  
ノ會計及區内人別ノ多寡人別職務ノ如何運送  
轉輸ノ便及人民刑律ノ異同ヲ計算シ其分別鎮  
臺ノ區別ト其別ヲ同フセスニハアルヘカラス  
各國<sup>備</sup>之ヲ區別スルニコルタルノ或ハジヒ  
シヨニテ以テ其地方陸兵ノ事ヲ統括シ全ク陸  
軍省ト格別ノ者ノ如シ國ニ鎮臺ノ設アルヤ其  
用ヲ知テ之ヲ施サハ其利實ニ之ヨリ大ナルハ  
無シ其用ヲ知ラスシテ之ヲ施サハ只ニ其用ヲ  
為サ、ル而已ナラス其害又之ヨリ大ナルハ無  
シ鎮臺ノ事務地方凡百ノ事務ト并行ヲ得サレ

ハ次シテ其妙用ヲ得サルナリ苟モ其妙ヲ得哈  
モ文武両輪ノ如クナラシメハ全國ノ軍備十全  
ト云ツ可シ軍備如此而之カ用務ヲ弁スル者ハ  
陸軍卿也陸軍卿ハ上帝王<sup>大統</sup>ノ勅ヲ奉シ  
下諸軍吏ヲ總督シ國體ニ<sup>大統</sup>遍<sup>領</sup>ニ國法ニ準シ諸務  
ヲ統理スルノ權アリ然レ<sup>大統</sup>決シテ兵隊ヲ号令  
シ士官ヲ褒貶黜陟シ法令ヲ交換スル等ノ權ヲ  
有セス然<sup>大統</sup>而省中ノ事務數十課アリ<sup>諸國大同小異</sup>  
<sup>二</sup>之<sup>異</sup>之ヲ大別シテ二部トス曰參謀曰給養ト  
ス之<sup>二</sup>之<sup>異</sup>ヲ總理スル則陸軍卿ノ本務ナリ參謀給  
養ノ事タル<sup>二</sup>之<sup>異</sup>古今<sup>二</sup>之<sup>異</sup>ヲ庭覽シ内外ヲ比較シ苟

モ國家人民ノ上ニ利益アル事件ヲ搜索シ以テ  
實際ニ施スヘシ百萬兵卒ノ勇氣三千將校ノ智  
略銳利ノ劍遠射ノ銃其得失郷ノ平生ニ在リ既  
往ノ事歴々以テ證スヘシ豈ニ念々細思セサル  
ヘケンヤ

頭我平生ノ所識并ニ今般歐米諸國ニ於テ研究  
習學セシ所トウ斟酌シ皇國人民ノ上ニ施行シ  
必ラス利益アルウ期シ左ニ其条件ヲ陳述セリ

第一

史國何物トナス大土ニシテ萬物具レリ萬物ノ  
中孰レカ最トス曰人ナリ人何ヲ以テ萬物ニ最  
タル曰性靈性靈ノ躰タル何ソヤ曰推衡曰慣習  
曰精神ナリ其用タル何ソヤ曰治術曰行儀曰實  
義ナリ人ノ能ク學ンテ識得スル者ニシテ人類  
ノ頼テ以テ生活シ政府ノ依テ以テ存在スル所  
以ニシテ顛沛モ離ルヘカラサル者ナリ誰カ此  
六者ヲシテ人間ニ行ハシムル曰政府ナリ政府  
何ヲ以テ之ヲ維持ス曰法アリ律アリ法ト律ト  
何ニ依ツテ成ル曰此六者ニ依テ成ル此六者ハ

誰カ其基ヲ為ス曰天ナリ故テ人類ノ之ヲ作為  
シ之ヲ變換シ得ヘキ者ニアラサルナリ苟モ治  
術ナク行儀ナク實義ナク其レ何ヲ以テ人タル  
ヲ得ンヤ權衡ナク慣習ナク精神ナク其レ何ヲ  
以テ政府タルヲ得ンヤ如此ハ野蠻ノ國ニシテ  
決シテ開化文明ノ國ニ非サルナリ又天地生成  
ノ意ニモアラサルナリ其本ヲ勤ルヲ知ラスシテ  
其末ニ趨ル者ハ野蠻ノ尤モ甚シキ者ニシテ民  
ノ父母タル職掌ニアラサルナリ我朝維新以  
降幕府其職ヲ奉返シ天兵逆賊ヲ討滅シ諸侯邦  
土ヲ奉返スル等ノ舉中外古今歴史上未曾有ノ

盛事ニシテ萬國奉テ称感スル所ナリ然リ而祖  
宗千年ノ國典ヲ改革シ古來慣習ノ礼節ヲ廢止  
シ事物道理ノ其當否ヲ知ラスシテ妄ニ之ヲ興  
廢スル等又中外古今未曾有ノ盛事ニシテ萬國  
奉テ怪視スル所ナリ如此ノ張弛内ハ皇國三千  
五百有餘萬ノ衆庶ニ對シ外ハ各國無數ノ人民  
ニ向ヒ古人ヲ顧ミ後人ヲ想ヒ恐懼ノ至ニ堪ヘ  
サルナリ伏願クハ自今邇末速切ノ患ヲ除キ力  
ヲ基本ニ尽シ信實ヲ人民ニ厚クセシメンテ  
其本末ヲ立タス其末治マル者アラス國其跡無  
クシテ國法アルヘカラス國法ナクシテ其律ア

ルヘカラス今人民中其法ト赫ト律ト何物タル  
ヲ知ラス此身生活中一定不致ノ物何ノ処ニ有  
リテ生命ヲ依頼スヘキ所以ノ者アルヲ知ラス  
政府ノ職務果シテ何ニ在ルヤ實ニ可致ノ甚ナ  
リ維新以降既ニ六年於今尚草創ヲ以テ名トス  
耻ツヘキノ至ナラスヤ夫レ政府ノ事タル確然  
変ス可カラサルノ法アリ侵スヘカラサルノ律  
アリ政府之ニ依リ萬機ヲ張弛シ喪廢之ニ頼リ  
生活ヲ安全ニスヘシ然ルニ目今ノ政府ノ法官  
貪ノ得テ变换スヘキ者ナルヤ政府ノ律官貪ノ  
得テ臆断スヘキ者ナルヤ政府ノ官貪何ノ法ア

リテ之ヲ撰挙スルヤ政府ノ官貪何ノ律ニ依リ  
テ之ヲ免除スルヤ天下ノ租稅誰カ為ニ之ヲ収  
歛スルヤ天下ノ財貨何ノ為ニ之ヲ出糶スルヤ  
人民ノ教導何ノ為ニ施行スルヤ外國ノ交誼何  
ノ為ニ互通スルヤ天下ノ兵力何ノ為ニ養育ス  
ルヤ顯義ホタ其確定不変ノ法不致ノ律アリテ  
人民ノ得テ依頼スヘキ者アルヲ知ラス其本未  
タ立タス其末何ソ能ク治マルヘケン語ニ所謂  
猿猴ノ療創ニシテ奇功相争ヒ新舊交換シ遂ニ  
天然ノ治養ヲ害スルニ至ルト實ニ的論ト云ヘ  
シ誠ニ軫念恻慮スヘキノ所ナリ伏願クハ我



朝固有ノ國皇天壤ト固守シ國法ヲ定メ  
歐米諸國ノ國法ト我人民慣習ノ法トヲ斟酌シ  
國法ノ條目ヲ審擬シ國法ニ依リ以テ國律ヲ確  
定シ普ク人民ニ教示シ數年ヲ經人民ノ能ク其  
理ヲ了解スルヲ待テ漸々實事ニ施行セシムラ  
令ヤ國法猶未タ定ラス國律猶未タ確ナラスハ  
諸省ノ事務何ヲ以テ施行スルヲ得シ人民ノ生  
活何ヲ以テ安全スルヲ得シヤ設令一時施行ノ  
宜シキヲ得ルカ如シト蚩氏其本末ノ順序ヲ失  
ヒ其輕重ノ權衡ヲ謬ラハ心ヲス其實跡上ニ於  
テ無數障害ヲ生スヘシ加之ルニ莫大ノ金額ヲ

損シ許多ノ光陰ヲ費シ無益ノ人カヲ用ユルニ  
至ルヘシ慎ニスニハアルヘカラス

茅二

陸軍省建設ノ法卿輔ノ權素ヨリ國體ニ依ツテ  
一定スヘク唯一省ノ事ナラス内外是非ノ比較  
諸務輕重ノ權衡宜シク朝廷ノ確定スヘキ者也  
省中ノ事務ニ至ツテハ盤リニ富強文明ノ國ニ  
比擬スルヲ禁シ預シメ己ノ彼ト比較ノ際裁許  
ノ差異ヲ生スルヤラ量得シ以テ實際ニ施スヘ  
シ然ラスニ其局アリテ其事ヲ成サズ其人ア

リテ其務ヲ知ラス其名アリテ其實ヲ見ス其金  
ヲ費シテ其益ヲ顕カス其物アリテ其用ヲ成カ  
ス甚シキニ至ツテハ其令アリテ其實行フヘカ  
ラナル者アルニ至ル如何トナレハ其人ホタ嘗  
テ其學ヲ勉メス其事ヲ驗セス其名實相交スル  
亦宜ナル哉故ニ其人ヲ撰フマ至テ難シ其勉學  
以テ證トナスヘキナク又驗事ノ以テ據トナス  
ヘキ者ナシ故ニ只其容貌弁説ヲ見聞シ之ヲ採  
用スルニ至レリ於是其撰幸アリ不幸アリ其事  
當アリ不當アリテ其損害牧奉ニ堪ヘス然リ而  
テ其罪全ク司撰ノ人ニ在リテ撰ヲ被ルノ人ニ

在ラス其損害決シテ司撰ノ人ニ蒙ラス奉テ皆  
人民各氏ノ上ニ歸ス然レモ政府ノ事遠大ニシ  
テ各氏一々其利害ヲ解ス能ワス故ニ敢テ政府  
ニ向テ之ヲ問フ者少シ然レモ若シ一家ニシテ  
其利害如此ナレハ其主其族將タ之ヲ何トカ云  
ハン實ニ官負ハ一國ノ家伶ノ如シ其撰其務慎  
シマスニハアルヘカラス故ニ其官負ヲ撰フ其  
法ナカルヘカラス其法ヲ立ツル又容易ナラカ  
ルヘシ今省務ヲ奉テ其事務ニ適スル者ヲ撰フ  
皇國中其人不足ニシテ其事務餘リアルヘシ然  
則皇國人民ノ開化未タ其開化富強諸國ノ如キ

事務ヲ為スニ適セサルナリ於是目今省中ノ事  
務總テ虚飾ニ属シ其名實相協ハサル者ヲ除キ  
去リ専ラ人材ヲ養育シ器械ヲ製造スルヲ以テ  
務トシ士官兵卒ノ備モ亦國內ノ警備ニ充ルヲ  
以テ限トスヘシ砲銃諸器モ亦在来諸品ノ内其  
實用ニ適スル者ヲ撰ヒ以テ其用ニ當ツヘシ諸  
事如此成ル可キ丈ケ慣習ニ依テ施行シ以テ他  
日ノ大成ヲ待ツヘシ然リ而眼前ノ事務即時施  
行セスニハアルヘカラサル者ハ新ニ議列ヲ開  
キ其事ヲ是非シ然後朝議ノ決ヲ得一定ノ上施  
行シ決テ容易ニ交換スヘカラス之ニ依テ當時

省内ノ諸務吾人民ノ勉カシ得ルノ限リヲ知り  
暫ク其事ノ實際ニ行ヒ得難キ者ヲ止メ其最要  
ニシテ欠クヘカラサル者ヲ摘採シ冗負ヲ除却  
シ雜費ヲ折減シ以テ實用ニ満足シ漸次ヲ以テ  
大成ナラシメニテ期シ諸局許多ノ數務ヲ合  
一シ參謀給養ノニ大別トシ之ニ二部長ヲ置キ  
諸務ヲ主宰シ之ニ付スルニ參謀士官并ニ會計  
軍吏各數十名ヲ以テシ而陸軍卿之ヲ統轄シ參  
謀士官數名ヲシテ卿ニ隸セシメニテ要ス而  
メ其事務ノ分課ニ至ツテハ本省ノ章程ト卿輔  
ノ權限ノ大不輕重ニ依ラサルヘカラス

陸軍歳費金決シテ定額ヲ立ツヘカラス必ラス  
 年々朝議ニ依ツテ定メ大藏省ニ於テ之ヲ統計  
 スヘシ省費并ニ爾他鎮臺等ノ費用金ハ直ニ其  
 地大藏省出張所ヨリ受取其受取シ金額ノ遣掃  
 高ヲ明細ニ書記シ一纏ニシ年々陸軍卿ヨリ大  
 藏卿ニ送致シ大藏省ニテ其各地出張所ニ於テ  
 従前掃ト出セシ高ニ照シ計算スヘシ而シ總テ  
 金額送受ノ際決テ現金現紙幣ヲ用ユヘカラス  
 又陸軍費金ノ内假令裁許ノ金額ヲ餘スト氏決  
 シテ省中又ハ鎮臺ニ貯置スヘカラス直ニ之ヲ

大藏省ニ送返シ置キ以テ他年ノ不足ニ預備ス  
 ヘシ

陸軍會計官ノ要タル自國物産品種ノ出高及  
 其定價ヲ知り又各國物産品種ノ生シ高及ニ其  
 原價ノ比較ヲ知ラサルヘカラス而シ一般ノ高  
 法學并ニ陸軍兵法ヲ通學セサルヘカラス此學  
 既ニ成リ然ル後此勤務ニ従事スル多年ニシテ  
 漸ク此事務ヲ司サトラシムヘシ然レ氏今日事  
 既ニ迫レリ故ニ暫ク回来ノ法ニ依リ旧負ノ能  
 ク其事ニ長シタル者ヲ撰ヒ其事ニ堪ヘサル者  
 ヲ除キ以テ其目前ノ急ヲ補ヒ他日ノ大成ヲ待

ツヘシ於是方今四民中壯年ノ者以上三十三歳  
以下銳敏ニシテ利才アル者其望ニ應ズル者ヲ  
撰テ會計専門ヲ申付兵學校ニ入レ書籍上ニ於  
テ兵學ノ大概ヲ講習セシメ又軍事必要ノ技術  
ヲ演習セシメ而後別ニ會計學校新ニ此校ヲ設  
ケ國會計士  
官ヲ招キ此生徒ニ入レ各科ヲ分テ書法算法諸  
帳取扱ノ法ヨリ經濟學ノ大意ニ至ル迄傳授セ  
シメ其卒業及勞ノ者ヲ撰テ暫ク旧負ノ其事ニ  
慣レタル人ニ付シ實事ヲ試ミシメ漸ク其事務  
ニ任セシムヘシ其給養物品ノ如キハ可成丈ケ  
自國ノ物品ヲ用ヒ其虚飾ヲ去リ實用ニ適スル

ヲ以テ目的トシ衣袴ハ總テ木綿ヲ用テ當時備  
國  
兵ノ衣袴如ク皇國縹子織ヲ用エヘシ帽ハ悉  
頭義大取ニ於テ已ニ之ヲ試ミタリ  
ク日本草ニテ製シ靴亦成リ丈ケ其人々ノ足  
相應スル者ヲ用テ偏鄙ノ人未タ着靴ノ便ヲ知  
ラサル者ハ暫ク草鞋ニテ用ニ充ツヘシ其他營  
内所用ノ物品モ成ル丈ケ國製ノ品ヲ主用スル  
ヲ以テ目的トスヘシ

第四

軍醫ノ事タル所時モ速ニ確定セスニハアルヘ  
カラス然ト雖モ目今ノ學制ニ於テハ常醫未タ  
軍醫ノ事ヲ兼學スルノ法アラス從テ軍醫ノ事

ラ知ル者以シ故ニ暫ク常醫ノ中畧軍醫ヲ學ラ  
講習シタル者數名ヲ撰ヒ給養會計部ノ一分ト  
シ軍醫ノ名籍及ヒ必要ノ物品ヲ司サトラシム  
ヘシ而メ軍醫ノ撰ハ總テ文部醫學校ノ試験ヲ  
經醫官トナル者ノ中ヨリ招募シ恰モ兵卒ノ其  
撰ニ當ル者其役ニ服スルカ如クスヘシ然レモ  
今日ノ常醫ヲ用ユルハ事ノ已ムヲ得サルニ出  
ルナリ故ニ一般醫學ノ制文武ヲ兼學スルノ方  
速ニ相立悉ク皆文部省ニ於テ之ヲ教育シ及第  
スルノ定則ヲ建テ都鄙府縣ノ別ナク皇國中ノ  
醫學ヲシテ一様ナラシメハ都鄙此在ノ兵卒養

生ノ善惡ナク戰時應役ノ醫負瀕亡ノ憂ナカラ  
シテヲ要ス醫學軍庸ノ別ナク方向一面ニ歸シ  
學歩一途ニ進ニハ人民利益豈收奉ニ堪ユヘク  
ニヤ

第五

器械火藥ノ事即チ砲兵ノ初學ナリ之ヲ工兵ノ  
初學ニ一致シ合テ一校トシ此校ハ工部省ニ學  
寮合併スルモ無支  
成業ノ上分テ各々専門ノ業ヲ講セシムヘシ此  
校ノ業陸軍中最難ノ學トス故ニ事物悉ク書上  
ニ學ヒ後テ又實地ニ試ムルヲ旨トス是ニ依ツ  
テ此校ヲ設タル必ラス都外ニシテ大器械所ノ

近傍ヲ撰ヒ建築スルヲ重要トス此校ノ建設陸  
軍諸校中第一着ナラニテ重要ス學則ノ如キハ  
挙テ歐洲各國ホリテクニク校決各國小異有リ  
ナシノ如クシ次シテ私意ノ折衷ヲ用ヒサル  
ヲ旨トスヘシモ各國ノ語學詩學而目今諸製  
造所東京大坂ニ在ル者ハ其盛大今日ヲ以テ到  
底トシ先ツ其事ニ任スル人物ノ技量ニ應シ諸  
品ヲ作為シ唯目前ノ所用ニ給スルヲ以テ目的  
トスヘシ然而後來ニ互リ益々盛大ヲ要スル者  
ハ其設法ヲ容易ニ定ムヘカラス必ラス大都外  
ニ於テ全國防禦線ノ都合及戰時運輸ノ便利ヲ

討算シ設置スヘキヲ要ス

第六

陸軍士官ノ良否偏ニ文部省諸校設置ノ法方教  
則ノ善惡ニ関ス人民一般ニ幼稚ヨリ小學ニ入  
リ稍長シテ中學ニ入り陸軍士官タラニテテ希  
望スル者ハ於是陸軍本校ニ入ルノ預備ヲ成シ  
本校ノ試験ヲ經入學スルヲ以テ定規トスヘシ  
砲工兵士官ト為ル者ハ中學ヨリ砲工學校ニ入  
リ然後砲工本校ニ入ルヲ以テ定則トスヘシ然  
リト雖目今文部ノ教則未タ全ク整ハス都鄙  
ノ學風尙未タ齊シカラス於是陸軍中殿三一一小

校ヲ設ケ一種特別ノ者トシ横濱近在ノ良地ヲ  
撰ビ建築シ其教則ハ大概文部省小中学校ヲ合  
一セル者ノ如クシ之ニ副ルニ陸軍諸技術ノ大  
略及陸軍専用諸字ノ初步ヲ以テシ其規律節制  
ハ總テ陸軍本校ニ模擬スヘシ尚目今ノ幼年校  
ヲ改正シタル者  
ノ如シ此校ニテ成業及芽ノ者并ニ文部省中學  
校ニテ成業及芽シ陸軍士官タラニテヲ希フ者  
ヲ試験シ合格ノ者ヲ採リ本校ニ入ルヘシ在校  
ノ期歩騎ハ二年トシ砲工  
參歩騎ハ四年トシ毎年成業出校ノ者各  
課中其品目第一等ニ等ニ位スル者而已ヲ撰ビ  
陸軍少尉ノ位階ニ任シ歐米諸國并ニ支那朝鮮

其他並細並諸國ニ遣シ年月ヲ期シ每人ヲシテ  
一二課ヲ理事セシムヘシ其他決テ漫ニ國外ニ  
出スヲ禁スヘシ此他及芽出校ノ輩ハ出校後一  
ケ年間ハ悉ク少尉ノ位階ニ並スル者トシ兵隊  
ニ付屬シ實地ノ景況ヲ演習セシメ然後定則ニ  
準シ漸々本官ニ進マシムヘシ本校學則ノ如キ  
ハ諸國決シテ大異アルヲナシ依之各國中一國  
ノ校則ヲ撰取シ以テ我本校ノ學則トナスヘシ  
米國ノ校則トシ然  
ニトシ校則トシ然併シナカラ砲工ヲ合テ一校  
トシ步騎合シテ一校トシ參謀學校ヲ一校トセ  
サルヘカラヌ而メ之ヲ建設スルノ地必テ繁



華淳薄、処テ避クルヲ以テ專要トス參謀及砲  
工學校ニ入ル者ハ皆中少尉ノ位階ニ相當スル  
者トスヘシ諸學生本校ノ及芽ヲ經ヘ本官ニ任  
スルノ後漸々追級昇進ノ則預シメ確定ナクニ  
ハアルヘカラス是陸軍中最要ノ事件也於是每  
級ノ勤仕幾年ト定期シ其定期ニ充ル者ハ每級  
ノ勤役古參ノ内其ノ學術試験ヲ經上階ノ欠負  
ヲ待テ上級セシムルヲ以テ汰トスヘシ而テ上  
級スヘキ者ヲ撰フノ期年間一度若シクハ二度  
ヲ以テ限トシ決シテ時々隨意ニ施行セシムヘ  
カラス之ヲ撰フノ官老士官ニシテ能ク諸事ニ

熟達セル者數名ヲ撰ヒ特別ニ理事ノ推ヲ與ヘ  
諸士官ノ昇級スヘキ者ヲ撰ハシメ陸軍卿之ヲ  
上奏シ而後勅任スヘシ而陸軍卿并諸將校ト雖  
凡敢テ之ヲ非トスルヲ得サル者トス而戰時  
并ニ出征中ノ年期及上級ノ法ハ素ヨリ特別非  
常ノ者トスヘシ然レ凡其法則預メ確定無クニ  
ハアルヘカラス右ニ速フル所ノ者ハ則今日ヨ  
リ八年若シクハ十年ノ目的也而目今ノ用務ニ  
充ツル者ハ則テ現在ノ士官及即今在校ノ諸生  
徒ヲ以テ十分スヘシ萬一不足アル時ハ下士官  
中ヨリ撰拔シ以テ八年若シクハ十年間ノ用ニ

充ツヘシ然リト虽モ其廢黜點涉ノ法ニ至ツテ  
ハ序時モ欠クヘカラサル者ナリ如此シテ後既  
往ノ如キ速成士官ヲ作り暫時ヲ補フテ嚴禁  
スヘシ

第七

下士官ヲ教育スル必ラス兵卒ヲ徵スルニ先々  
、スニハアルヘカラス而メ之教練スルニ學術  
並ニ進ニ昇級ノ法勤役ノ古參ト學術ノ試験ニ  
依ルヘク故ニ之レヲ教育スル必ラス年月ヲ費  
カスニハ有ルヘカラス於是各地鎮臺ニ於テ各  
兵下士官學校ヲ設ケ毎年徵兵人負ノ中ヨリ其

材幹アリテ筆算讀書シ得ル者ヲ撰拔シ委シク  
陸軍勤仕ノ旨ヲ説諭シ此校ニ入レ從來兵學校  
ノ試験ヲ經士官ト成ル者ヲ付シ之ヲ教授セシ  
メ此校ニ留学スル凡一年ヲ以テ期トシ其成業  
ノ免許ヲ得ル者ハ軍曹ニ任シ卿里ニ歸ラシメ  
其成業シ能ワサル者ハ伍長又ハ兵卒トシ同ク  
卿里ニ歸ラシムヘシ如此シ以テ後年徵兵ノ用  
ニ備ヘ且ツ向後護國軍ノ預備トシ毎年一度若  
シクハ二度産業ノ間ヲ以テ四周又ハ五周日各  
鎮臺ニ召集シ實地演習并學術ノ検査ヲ為シ此  
時ニ於テ總テ廢黜點涉ヲナスヘシ今之ヲ概算

シテ全國ノ人民三千五百万人トシ之ヲ平均シ  
年齢一歳ヨリ百歳迄ノ者~~一~~百人ノ内同年齢ノ  
者一人ト見三十三歳ヲ以テ平均ノ年齢ト為ス  
ノ比例ニ依リ女子ヲ半減シ此高ラ除ケハ同年  
齡ノ男子ニ<sup>十</sup>歳四十一万三千三百三十三人也  
此内不具ノ者三分ノ一ト見此高ラ減シ二十七  
万五千五百五十六人ナリ内筆算讀書スル者ヲ  
六分ノ一トスレハ四万四千二百六十九人ナリ  
内獨子独孫及罪科ニ羅ル者等凡三分ノ一ト見  
之減シ餘リ兵役ニ服スヘキ者凡一万四千七百  
五十六人ノ割合ナリ毎年其兵貢ラ各鎮臺下ニ

徵集シ一年間在屯セシムヘシ尤モ會計ノ都合  
ニ依リ半減又ハ三分ノ一ヲ一年間留メ置キ其  
余ハ三ヶ月或ハ六ヶ月ヲ期トシ其業ノ大概ヲ  
学ハシメ師郷セシムヘシ此中最モ能ク學術ニ  
達スル者ヲ撰ヒ軍曹ニ任シ師郷セシムヘシ軍  
曹ノ内最モ材幹アリ學術共ニ進之上士官トナ  
ルノ試験ヲ受ケ及第スル者ハ漸々上士官トナ  
ルノ法方ヲ立ツ可シ如此セハ學術兼備ノ下士  
官ヲ得大ニ陸軍ノカラ増スノミナラス全國人  
民學業進歩ノ補益ヲ為ス實ニ莫大ナリ此法一  
夕ニ確定シ八年若シクハ十年ヲ經ハ全陸軍下

士官ノ數ヲテ全國人民ノ兵役ニ服スル者ニ  
付シテ餘リアルヘシ  
兵ハ護國ノ要器ニシテ内外ノ景況應シ弛張ス  
ヘキ者ト雖兵之ヲ教練スルノ士官及下士官十  
ク之ニ付スルノ良器ナク之ヲ運フノ道路ナク  
之ヲ保護スルノ砲臺ナク况ヤ民律兵律其權衡  
ヲ得ガハニ於テラヤ然ルニ巨萬ノ金額ヲ費シ  
許多ノ人カヲ勞シ多少ノ光陰ヲ費シ兵卒ヲ徵  
募ス此レ實ニ其本末ヲ知ラガハルノ甚シキ也伏  
願クハ斷然徵兵ノ奉ヲ延ヘ~~此~~ノ間國中ノ警備  
ニ充ツル者各地下士官學校ノ人負ヲ以テシハ

年或ハ十年後ノ大成ヲ期シ只其根本ニ尽カス  
ルヲ以テ日今ノ務トシ國法ニ依リ省中ノ章程  
ヲ定メ國律ニ準シ兵律ヲ改正シ軍律中割服ノ  
甚シカハ及スル者トスヘカラス刑天理ニ特ル  
公理ニ及スル者トスヘカラス天皇  
陛下ノ陸軍大規則ヲ編束シ諸兵學校ヲ興シ各  
種火藥ノ製造城堡及道路堤坊并ニ家屋建築ノ  
事ヲ以テ專務トスヘシ而八年或ハ十年ヲ經ハ  
許多ノ士官及下士官ヲ得各種火藥ノ製造城堡  
及道路堤坊并ニ家屋建築ノ事亦以テ其用ニ適  
スヘク文部教育ノ道亦全國ニ遍子カルヘシ文  
部所轄諸小學校學則ニ増加スルニ陸軍所要

ノ技術跡術演陣ノ如キ者ヲ以テシ童子年齢十  
歳ヨリ十六歳迄ノ者ヲシテ毎日一時間又ハ三  
十分時間之ヲ教練シ毎日曜日ニ於テ一村落又  
ハ一郡ニ招集合併シ之ニ付スルニ其地在任ノ  
陸軍下等士官ヲ以テシ陣法ヲ演セシムヘシ如  
此シテ八年若シクハ十年ヲ經ハ皇國壯年ノ人  
氏悉ク文武ノ大概ヲ了得シ遂ニ老少ノ別ナク  
文武ヲ知り續々絶エルノナキニ至ルヘシ於是  
始テ兵卒ヲ徵募シ隊伍ニ編スヘシ其徵募ハ各  
地ニ付シ招集スヘシ此ノ時ニ當テハ其募ニ應  
スル者ノ年二十歳悉ク皆讀書筆算ヲ知り技術跡

術演陣ヲ知ル故ニ入官ノ日ニ至リ教授スヘキ  
者ハ陸軍所要ノ數件ニ過キス是以テ滞官ノ日  
數凡ニヶ月又ハ三ヶ月ニシテ十分ナルヘシ砲  
兵造藥兵ノ如キモノト密氏四ヶ月又ハ五ヶ月  
ニシテ充分スヘシ而テ各鎮臺ニ於テブリガ  
ト隊ニ編束シ此兵ヲ以テ常備トスヘシ親兵ハ  
則輦下鎮臺ノ數ブリカドヲ以テ之ニ當ツヘ  
シ然後本郷ニ歸シメ七年間ハ預備ノ籍ニ入ル  
而預備年限中ノ者ハ各郡ニテ毎月一日或ハ十  
五日ニ於テ集合的ノ演習ヲナサシメ毎年兩  
度各鎮臺及官所ニ召集シ實地演習ノ大訓練ヲ

為カシムヘシ或ハ又時アリテ不意ニ召集調練  
スルヲモアルハ預備籍ヲ出ル者ハ皆ナ以テ  
護國軍ニ編入シ年齢ヲ限ラス壯健ニシテ軍役  
ニ堪ユル者ハ擧テ以テ國家ヲ保護セスニハア  
ルヘカラサル者トス抑鎮臺及官所ノ分割其立  
法實ニ容易ナラス必ラス四達運輸ノ処進退防  
禦ノ地理ニ依リ而テ又及刑藏部諸省出張処ノ  
配置ト其區分ヲ同フヤスニハアルヘカラス加  
之ルニ文部ノ教育ヲ以テシ是彼互ニ相權衡シ  
人民ヲシテ都鄙ノ別ナク歡苦ヲ一様ニシ人亦  
苟モ欠クヘカラセル者ハ文武ノ道ナル所以ヲ

知ラシムヘシ如此措置次ニテ速成ヲ主トスヘ  
カラス遠ク将来ニ目的シ基ヲ建テ漸次ニ之ヲ  
陪養セスニハアルヘカラス普國軍制ノ盛大ヲ  
致スヤ千八百八年ヨリ千八百十二年ノ間ニ於  
テヤ子ラール、ホンス、シヤンホルスト、氏旧制ヲ  
一變シ鴻基ヲ堅立セリ當時普國ニ常備スル兵  
員僅ニ四萬二千ナリシカ千八百六十六年煥  
國ト交戦ノ日ニ至リ十三コルノ大兵ヲ擧ルヲ  
得タリト而又今日ニ至テハ百三十八萬人餘ノ  
兵員ヲ備ヘリト是他ナシ其基礎ヲ建ルヤ四年  
ノ日月ヲ費シ思フ焦シ慮フ苦メ確定シタル者

ニシテ是ヲ守ル甚ク堅ク歳ヲ重テ益盛ナル所  
以ノ者星霜六十一年ノ間陸軍「ミニストル」ニ任  
スル者僅カ數人ニシテ悉クセザラシル、ボンス  
シヤレホルルスト氏ノ旧基ニ依レハナリ然リ  
ト宙モセザラシル、ボンスシヤンホルスト氏ノ  
力能ク六十一年ノ久ニ堪ユ可ラス數人ノ「ミニ  
ストル」又能クセザラシル、ボンスシヤンホルスト  
氏ト同心ナルヘカラス然ルニ能ク旧基ヲ守リ  
敢テ交換ナキ所以ノ者ハ國法有リ能ク之ヲ維  
持シ數「ミニストル」ノ能ク大成ヲ期シ速功ヲ競  
ハサルニ依ラサランヤ

右ニ掲書スル所ノ數条顯義平生ノ所思ニシテ  
決シテ一朝一夕ノ考察ニ非ス自カラ知ル其忌  
諱ニ觸レ嫌疑ニ涉ル者頗ル多キヲ然リト宙氏  
愛國ノ念勅々自カラ禁スル能ワス冒瀆ノ罪素  
ヨリ萬死誠惶誠惶頓首

明治六年 九月十日

陸軍少將山田顯義





